
通り魔

Tomiono

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

通り魔

【著者名】

Tomiono

N6560E

【あらすじ】

僕はいたつて平凡な生活を平凡に送る中学生であった。しかし、突然、うっかりしたことからとんでもない事件に巻き込まれていく。

・・！

(前書き)

今回の課題は初めての試みだったので、ちょっと面白かったです。
キーワードは「直証」、「ケーブル」、「おつかれ」の三つでした。
では、お楽しみあれ。

僕はいつものように毎日の生活を過ごしていた。進学塾の宿題がちよつと切羽詰つてきたので、今日はずっと窓際の机で勉強をしていた。部屋は暑かったので、窓は開け放してあった。もちろん、網戸は張つてあつたが、窓の外からは蒸し暑い、夏の夜の風が僕の顔に当たつた。

窓のすぐ下に走る道路には、一人の仕事帰りの○しらしき若い女性が一人で歩いていた。僕は、その姿を見ると、ちょっと心配になつた。何故なら、最近は若い女性を狙つた通り魔の事件が頻発していたからだ。地元の自治体も警察も警備に力を入れているが、あまり地域の団結が強くないため、あまり効果はなかつた。

女性が僕の家の前を通り、そのまま道を歩いていった。まあ、街灯も多いし、警備の人の数も思つたよりが多い。大丈夫だろうと思つて、そのまま宿題を続けた。

そのとき、三軒ぐらい先の道の角まで行つた女性が、突然角から現れた黒い服の男に、体当たりをされ、そのまま倒れた。窓のそばにある電線とケーブルのせいによく見えなかつたが。

えつ！？ 僕は思わずそう思い、身を乗り出してみてしまつた。倒れた女性のしたからは、薄い街頭の明かりでも見える、赤黒い液体がにじみ出でていた。男は、女性を見た。そのとき、遠くから誰かの声が聞こえたので、男は僕の家のほうに走り出してきた。やばい！ 僕はそう思つて、引き下がろうと思つたが、体が強張つて動かない！ まるで氷りついたように、僕の体はそのまま窓から乗り出しあつたままだつた。

男は走つてきて、僕のほうを驚いて見た。街頭の光で、その男の顔ははつきり見えた。

どこかで見たことあるような、つかみ所の無い顔であつた。だが、先ほどの女性が倒れた角に人が集まつてきたので、男はそのまま走

り去った。

まさか・・・。いつの顔も見られた？ まさか、そんなこと・・・。だが、僕ははつきりと顔を見てしまい、向こうも見られたと思つているのだ。狙われる・・・？ 警察に言つか？

しかし、つかみ所も無い顔なのに、顔を見たからといってそれが何の直証になるというのだ。

僕はそんなことを考えながら、一人、部屋の隅で縮まっていた。

次の日、僕は学校が終わると、すぐに進学塾に向かった。昨日は散々、帰りが遅くなるから進学塾は休みたいと言つていたのだが、進学塾も高いし、犯人はいくらなんでも塾に襲いにはいかないだろうし、帰りは母が車で送り迎えしてくれることだった。母は若く、そのスレンダーさには似合わない空手の達人なので、「もし犯人が来たら骨をいくつか折つてやるわよ」と言つていた。

僕は宿題を取り出した。・・・あ！ 昨日のあれつきり終わってない・・・！

細身のおっさん、花川先生が宿題をチェックしに回つてきた。

「角川！ も前、なんだ、いつも間違いはあってもちゃんとやつてくるのに、今日はどうした！」

「すみません・・・」僕はそう答えるしかなかつた。犯人のことを話しても、たいしたこととは教えられないし、どうせ馬鹿にされるか相手にされないだけであった。

そして、進学塾は終わり、僕は塾の前まで迎えに来てくれた母の車に乗り、家に帰る。

車のヘッドライトが、住宅街の堀に光を当て、車が動くにつれて光も怪しく動いた。そして、母が車を素早く車庫の中に入れる。

「あれ？ 今日は父さんは？」

と、僕は車から荷物を下ろしながら言つた。

「お父さんは、今日は仕事の都合で早く帰つてこれないのよ、どう

しても

と、母は答えた。

僕は何か嫌な予感がしたが、その予感が当たらないことを願つて風呂に入った。

風呂の部屋の中は湯気で曇つており、なかなかいい音響となつていた。僕はとても気持ちよく、つい鼻歌を歌いはじめてしまった。

そのとき、風呂場の窓をコンコンと叩く音がした。僕はビクッと息をのんで、恐る恐る、ゆっくりと顔を窓の方へと向けた。

しかし、そこにいたのは母であった。僕は窓を少しだけ開けた。

「ショウちゃん、ちょっとママがこの隣のおばさんに晩御飯をおすそ分けしてくるから」と言い、母は隣の方へと健康サンダルで走つていった。

僕はほっとした。肩の力を抜き、首もうな垂れて、深いため息をついた。

そのとき、また窓にコンコンと叩く音がした。まだ母が何か用事があつたのかな？

僕は振り向いて窓の方を向き、飛び上がつた。湯船の湯が沢山飛び散つた。僕の背筋は凍りつき、筋肉も強張つた。窓には、両手を押し付け、大きな目で睨んでいる、昨日の男の顔があつた。

幸い、窓はとても人が一人通れるようなスペースはなかつたので、男は通れずについた。男は苛立ち、窓から立ち去つた。

僕は、これは滅茶苦茶やばいことになつているぞと思い、急いで風呂を出て、服も着ずに急いで二階の部屋に駆け上がり、部屋のドアを閉めて、鍵も閉めて、机をドアの前に置き、部屋の隅においてあつた野球バットを持ち、戦闘態勢に入つた。しかし、いくらなんでも全裸で殺人犯と戦いたくなかったので、一応動きやすいデニムのシャツとジーンズに着替えた。

そのとき、下の階から、窓の割れる音がした。

窓が割れた後、何か重量のある物を殴るような音がした。そして、何かが倒れた。まさか・・・母さん！？ そんなに強いのか、犯人

は！？

そして、静寂。何も聞こえない。男は、忍び足で歩いているのだろう。

しかし、その時、誰かが階段を少しづつ上がってくる音が聞こえた。ギシッ、ギシッ、ギシッ。

古い階段の板が、誰かの体重の重みできしんでいた。
僕の筋肉はどんどん強張る。

足音が止む。どうやら、この部屋のドアの前で止んだ様だ。
この部屋のドアの下から漏れる電灯の光で気付いたのか。しまった
！

そして、また少しの間があいた。

僕は全身で集中していた。手に持った金属バットには、汗がつき始めた。心臓はバクバクと、止むことなく大きく鼓動をしていた。いきなり、ドアは安い鉄製の机ごと吹き飛ばされ、僕はよけられずに机の下敷きとなつた。手足は机に封じられ、顔だけが出ていた。しまった！ もう、これまでか・・・！

そう思つたら、ドアの向こうの暗闇からは、拳を握り、構えていた母が現れた。

「あら、シユウちゃん！」

母は僕に駆け寄り、机をどかした。

「あれ！？ 母さん、何で！？ 僕はてっきり魔が来たのかと・

・

母は、口に手をあて、笑つた。

「それがね、ちょっとシユウちゃん見てみて！..

母に連れられて僕は下の階に行つた。すると、割れた台所の間のそばでのびているのは、あの男では無いか！

「母さん・・・これ・・・」

「実はね、ガラスが割れる音が聞こえたから、ママ急いで帰つてきたのよ。そうしたら、台所でこの男がきょろきょろしていて、いかにも怪しそうだったから、一撃でのしちやつたのよ

僕は今度は別の理由で背筋が凍るような思いになつたが、とにかくこの騒動に意外な、よい結末がついたのはよかつた。

その後帰ってきた父は、今回の一一番精神的にダメージを負つた人かもしれない。家に帰つてくると、周りにはパトカーだらけ。僕の言つていたことと照合し、母がいたのも知つていて、犯人に家族がやられてしまつたのではないかと思い、犯人が連行されて家を出でくる前に気を失い、倒れてしまつた。そして、近所の病院まで運ばれた。

地元に警察の調べによると、男の名前は石垣啓一。大学生で、二十二歳。聴取によると、男はストレス発散のために、気がついたらこんなことをしてしまつていたらしい。男は、今まで怪我を負わせ、死なせてまでしまつた人たちの遺族を回つて、深く謝罪した後、裁判にかけられるらしい。最も、母が負わせてしまつた全治二ヶ月の、あばら骨の粉碎骨折や手足の複雑骨折の所為で後二ヶ月は動けないが。

ちなみに母は、近所の自治会から絶賛され、警察からも表彰され、母は得意気に、その表彰状は食卓の横に額縁に入れて飾つてある。以前から母のことが実はちょっと気になつていたという、既婚者である進学塾の花川先生は、今回のこと機に、惚れ込んで、近所の人と一緒に母のファンの会を始めてしまつた。花川先生の奥さんもファンの会に入つてるので複雑だが。ちなみに名前ある会員第一号は父である。

僕は僕で、母の果てしない強さに一種の恐怖と、そして安心感を抱くだけであった。

そして、また僕の毎日に戻る。

(後書き)

まあ、ホラーとしてはちょっと疑問のよつた氣もします。小説を書き始めて第9作で、あまり言い出来ではないです。書いてて楽しかったんですけどね。注意点、駄目出し、アドバイスなどあつたら何でもお願いします。気軽にコメント入れてください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6560e/>

通り魔

2010年10月10日07時57分発行